

福島県 ホープツーリズム 総合ガイドブック

HOPE TOURISM GUIDEBOOK

世界で唯一の
複合災害を経験した
福島でしか得られない
新しい学びのスタイル

目次

知事挨拶 / 実施団体・ツアー団体一例	02
ホープツーリズム / 公式アンバサダー	03
フィールドマップ (アクセス・掲載施設一覧)	04
なぜ、福島なのか?	06
ホープツーリズムとは	08
モデルコース	10
フィールドパートナー (FP)	14
学びの流れ	16
復興に向け果敢にチャレンジする人々との対話	18
施設・プログラム	20

震災遺構浪江町立請戸小学校



[知事挨拶]

ふくしまから、 持続可能な未来を探究・創造する

想像力を働かせて、もっと深く、前向きに。一緒に学び合う新しいスタディツアーへ

東日本大震災以来、全国の皆様からたくさんの励みや温かいご支援をいただいておりますことに改めて心から感謝申し上げます。
福島県は世界で唯一、地震、津波、原子力災害、そして風評被害を一度に経験し、今もなお複合的かつ多様な課題がある一方で、復興を強く願い、困難な状況に屈することなく未来を見据え、挑戦を続けている人々が大勢います。そんな福島だからこそできる“新しい学び”があります。
福島県では、福島のありのままの姿と復興に向け果敢にチャレンジする人々との対話を通して、震災・原子力災害の教訓、復興、そしてこの逆境からどうすれば脱却できるのかを考えることで、自分自身を成長させる学びの旅「ホープツーリズム」を推進しております。
本ガイドブックでは、教育旅行や、企業等の人材育成などのニーズに応じたツアー内容や学びの効果等について紹介しておりますので、ぜひご覧いただき、福島をフィールドとした「ホープツーリズム」の実施をご検討いただきますようお願いいたします。



福島県知事 内堀 雅雄



HOPE TOURISM

震災・原子力災害の 被災地域をフィールドとした 新しいスタディツアー

世界で類を見ない「複合災害(地震・津波、原子力災害、風評被害)」を経験した唯一の場所、福島県。
ホープツーリズムとは、今日までの事実、教訓、復興への挑戦から、**[見る][聞く]**そして**[考える]**ことで「持続可能な社会・地域づくりを探究・創造する」ことを目的とした、福島オンリーワンの新しいスタディツアーです。



見る

施設見学、フィールドワークから
ありのままの姿を体感



聞く

復興に向け果敢にチャレンジする
人々との“対話”



考える

震災・原子力災害の教訓を
未来(社会・地域・日常・自分自身)にどう活かすか

[実施団体・ツアー団体一例]

学校

- 埼玉県 ● 埼玉県立不動岡高等学校
- 千葉県 ● 千葉県立船橋高等学校
● 市川中学校・高等学校
- 東京都 ● 筑波大学附属駒場中学校・高等学校
● お茶の水女子大学附属高等学校
● 東京都立豊島高等学校
● 駒場東邦中学校・高等学校
● 成城学園中学高等学校
● 明治大学付属中野中学・高等学校
- 神奈川県 ● 神奈川県立横浜緑ヶ丘高等学校
● 鎌倉学園中学校・高等学校
- 滋賀県 ● 滋賀県立河瀬中学校・高等学校
- 大阪府 ● 明星高等学校
- 兵庫県 ● 灘中学校・高等学校
- 広島県 ● 広島学院中学校・高等学校
- 福岡県 ● 麻生看護大学校
- 沖縄県 ● 昭和薬科大学附属高等学校・中学校
- 台湾 ● 台中市立惠文高等学校

企業 (五十音順)

- ANAホールディングス株式会社 ほかにグループ企業
- 鹿島グループ企業
- 株式会社デンソー
- 株式会社本田技術研究所 ほかにグループ企業
- 日産自動車株式会社 新人研修
- パナソニックホールディングス株式会社 ほかにグループ企業
- 読売新聞東京本社 新人記者研修

行政機関・ツアー団体

- 人事院公務員研修所 初任行政研修
- 経済産業省 福島現地研修
- 環境省「福島、その先の環境へ。」
- 復興庁「東日本大震災の風評払拭に向けた現地視察ツアー」
- 福島県庁 ふくしま復興現地研修
- 一般社団法人日本経済団体連合会 加盟企業
- J・JEHA日本電熱機工業協同組合
- 東京都「東京国際ユース(U-14)サッカー大会」
- 台湾国際教育交流連盟

[ホープツーリズム公式アンバサダー]

福島県は、ホープツーリズムの教育的価値や魅力を広く伝え、多くの方々にご参加いただくことを目的として、2024年11月に4名の公式アンバサダーを委嘱しました。
福島県と福島県観光物産交流協会では、4名のアンバサダーの皆さんと共に、ホープツーリズムの学びの質の磨き上げを行い、その魅力を県内外に広く発信しております。

教育分野



福島大学 准教授 前川 直哉 氏

灘高校在学時に阪神・淡路大震災で被災し、その後同校の教師として勤務。東日本大震災後、生徒と「東北訪問合宿」を実施し、被災地支援に取り組んだ。2014年3月に同校を退職し、福島県へ移住。ホープツーリズムの開始当初から事業の推進に尽力いただいている。

教育分野



灘中学校・高等学校 教諭 池田 拓也 氏

「高校生と社会をつなぐこと」をモットーに、学校内外での活動に取り組む。灘高等学校に加え、「チームHYOGO(兵庫県内の複数校)」も結成し、多くの高校生に学びを届けている。福島をフィールドに、過去・現在・未来へとつながる社会課題や苦悩、希望に触れ、考える学びを実践している。

企業分野



浅野燃糸株式会社 代表取締役社長 浅野 雅己 氏

本社は岐阜県。福島大学出身。経済産業省の「繊維の将来を考える会」の活動時に双葉町と縁が生まれ、2023年4月に燃糸工場・ショップ・カフェの複合施設「フタバスーパーゼロミル」をオープン。浜通りの復興をけん引しており、見学者の受入も積極的に行っている。

メディア分野



株式会社ON-WORK 代表 映画監督 古波津 陽 氏

東日本大震災後の福島について思いを語る映画「1/10 Fukushimaをきいてみる」を2013年から毎年1作品制作。全国上映を通じ福島の現状を発信し、国内外で高い評価を受ける。2024年3月と2025年1月には、上映付ホープツーリズムツアーを実施するなど、参加者に福島の今を伝えている。

多彩な発見と出会いのフィールド Fukushima

北海道・岩手県に次ぐ全国第3位の面積を持つ福島県。

その広大な領域は、地形・気候・交通・歴史などの面から、太平洋と阿武隈高地に挟まれた「浜通り」、

阿武隈高地と奥羽山脈に挟まれた「中通り」、奥羽山脈と越後山脈に挟まれた「会津」の3地域に分けられ、

それぞれの魅力を活かして発展してきました。

津波と原子力災害の影響を受けた浜通りを中心に、

県内各地の多彩な観光・学習コンテンツを組み合わせた

プログラムの実現が可能です。



主要都市からのアクセス

東京から	
電車利用	<ul style="list-style-type: none"> ●東北新幹線 東京駅～郡山駅(約1時間20分) ●常磐線(特急ひたち) 東京駅～いわき駅(約2時間30分)
仙台から	
電車利用	<ul style="list-style-type: none"> ●常磐線(特急ひたち) 仙台駅～いわき駅(約2時間20分) ●仙台駅～双葉駅(約1時間15分) ●貸切バス利用 仙台空港～双葉駅(約1時間15分)
札幌から	
飛行機利用	●新千歳空港～福島空港(約1時間20分)
函館から	
電車利用	<ul style="list-style-type: none"> ●北海道新幹線 新函館北斗駅～仙台駅(約2時間40分) ●仙台駅～福島駅(約20分)
名古屋から	
飛行機利用	●中部国際空港～仙台空港(約1時間15分)
電車利用	<ul style="list-style-type: none"> ●東海道・東北新幹線 名古屋駅～郡山駅(約3時間10分)
大阪から	
飛行機利用	●伊丹空港～福島空港(約1時間10分)
電車利用	<ul style="list-style-type: none"> ●東海道・東北新幹線 新大阪駅～郡山駅(約4時間5分)
広島から	
飛行機利用	●広島空港～仙台空港(約1時間40分)
電車利用	<ul style="list-style-type: none"> ●山陽・東海道・東北新幹線 広島駅～郡山駅(約5時間30分)
福岡から	
飛行機利用	<ul style="list-style-type: none"> ●福岡空港～伊丹空港～福島空港(約3時間) ●福岡空港～羽田空港(約1時間30分) ●羽田から電車もしくは貸切バスを利用し福島県へ ●福岡空港～仙台空港(約2時間15分)

掲載施設一覧

- 1 東日本大震災・原子力災害伝承館
- 2 震災遺構 浪江町立請戸小学校
- 3 浪江町営大平山公園
- 4 JR双葉駅周辺
- 5 とみおかアーカイブ・ミュージアム
- 6 相馬市観光協会
- 7 南相馬市観光交流課
- 8 いわき震災伝承みらい館
- 9 中間貯蔵事業情報センター
- 10 中間貯蔵施設
- 11 福島県環境創造センター交流棟コミュニティ福島
- 12 特定廃棄物埋立情報館リプルンふくしま
- 13 日本原子力研究開発機構 福島再生可能エネルギー研究所(FREA)
- 14 東京電力 廃炉資料館
- 15 東京電力福島第一原子力発電所
- 16 産業技術総合研究所 福島再生可能エネルギー研究所(FREA)
- 17 浪江町棚塩産業団地(海光の丘)
- 18 富岡復興メガソーラー・SAKURA
- 19 阿武隈風力発電所
- 20 浅野燃系ファブスーパーゼロミル
- 21 福島RDMセンター
- 22 福島ロボットテストフィールド
- 23 株式会社ライスレジン
- 24 J'ヴァイレッジ
- 25 道の駅なみえ
- 26 とみおかワイナリー
- 27 ワンダーファーム
- 28 トロピカル・フルーツミュージアム
- 29 ネクサスファームおおくま
- 30 紅梅夢ファーム
- 31 ホップジャパン
- 32 かわうちワイナリー

なぜ、福島なのか？

いくつもの課題から発見する、自分を成長させる問いの力

複合災害を経験した福島県では、現代社会が抱える多様な課題が一度に顕在化し、今も地域や人々の暮らしに影響を与えています。これらは決して「福島だけの問題」ではなく、それぞれの地域が抱え、解決していくべき課題でもあります。福島でのさまざまな課題に向き合う体験は、物事を多面的に捉え、自分自身を成長させる問いの力を育むことにつながります。



2011年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源とするM9.0の巨大地震が発生。地震のほか、太平洋沿岸部の浜通りに大津波が押し寄せた。

地震発生後、最大約13mの津波が福島第一原発に襲来。1～4号機は、ほぼすべての電源を失ったことで原子炉を冷却できず制御不能となり、大量の放射線物質が放出された。

震災当日以降、原発事故の懸念から多くの福島県民が県内外への避難を余儀なくされ、現在もまだ帰還できずに避難生活を続けている方が多数おり、避難の長期化は、地域住民の大きな負担となり関連死も増え続けている。

住民の帰還がなかなか進まない中、原発の廃炉作業・除染土処分を進めるとともに、浜通り地域の復興と地域再生を実現するため、新たな産業基盤の創出が求められている。福島イノベーション・コースト構想に基づき、各重点分野の拠点整備が進められているほか、産業集積や教育・人材育成、交流人口の拡大などの取り組みが行われている。

震災から現在へ続く、社会課題と取り組み(例)

福島には、防災、環境、産業、人口減少、教育、地域コミュニティなど、さまざまな社会課題が互いに関係し合いながら存在しています。福島のフィールドには、地域づくりや社会活動のあり方を問い直すテーマが広がっています。

●大震災の発生

未曾有の複合災害がもたらした被害を知る

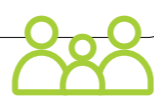
- #地震・津波による被害
- #救助活動
- #地域コミュニティの分断
- #防災・減災の意識
- #原発事故の発生
- #避難所のあり方
- #危機管理の対策



●人口の大幅な減少

長期避難の影響、帰還後の課題について知る

- #住民居住率と帰還率
- #風評被害
- #地域づくり
- #移住・定住の促進
- #帰還困難区域と除染
- #労働力不足
- #スマートシティ
- #避難先での生活定着



●地域インフラ再整備

住民帰還に向けた取り組みと課題を知る

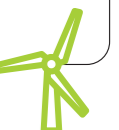
- #交通インフラの復旧
- #公共施設の復旧
- #教育施設の再構築・統廃合
- #医療機関の復旧
- #商業施設の再開



●エネルギー問題

持続可能なエネルギーのあり方を考える

- #原発の再稼働
- #再生可能エネルギー
- #地域との合意形成
- #暮らしへの影響
- #原発依存からの脱却
- #代替エネルギーの課題
- #地域との合意形成
- #水素エネルギー



●環境汚染

原発事故による環境被害と回復へ向けた課題を知る

- #放射性物質の拡散による汚染
- #ALPS処理水
- #除染土の中間貯蔵と最終処分
- #廃炉ロボットの開発
- #生活圏の除染
- #風評払拭
- #原発廃炉作業



●産業・雇用の課題

震災前後の地域経済の変化について知る

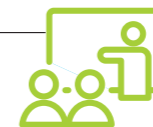
- #基幹(電力)産業の喪失
- #労働力の不足
- #農林水産品の風評払拭
- #スマート農業
- #農林水産業の再建
- #新たな基幹産業の創出(福島イノベーション・コースト構想)
- #移住・定住支援



●日々の暮らしの課題

地域の暮らしを支える仕組みを見つめ直す

- #医療・福祉施設の減少
- #教育施設の再構築・統廃合
- #地域コミュニティの再生
- #避難先での学校生活
- #未来創造型教育(学校)の取組
- #ICTの活用



●コミュニティ・伝統文化

帰還住民と移住者が紡ぐ地域文化の歩みと価値を考える

- #文化交流
- #後継者の育成
- #関係・交流人口の拡大
- #伝統産業の継承
- #祭り・伝統文化の継続



被災地のさまざまな社会課題を考える ことが、これからの日本の未来をつくる。

ホープツールリズムとは「問いを育てる」探究型プログラム

福島で感じる希望（ホープ）。
それは明日の学びの原動力。

光も、影も。報道だけでは分からない
福島の「今」を

👁️ 見る

施設見学、フィールドワークから
ありのままの姿を体感

復興に向け確かに歩み出している地域、持続可能な未来を担う新しい取り組みが始まっています。一方、長年の避難指示による地域への影響を感じる街並み、避難指示が継続中の地域……。報道だけでは伝わらない「光と影」。その光景が、福島の「今」です。

2017年 大熊町



2024年 大熊町



復興に向け果敢にチャレンジする人々。
福島への「想い」を

👂 聞く

復興に向け果敢にチャレンジする
人々との“対話”

地震・津波、原子力災害、風評被害……。未曾有の困難の中で、それでもなお復興に向け果敢にチャレンジする人々が、福島にはたくさんいます。そうした人々との対話から、多くの刺激や気づきを得ることができます。



福島の「ありのままの姿（光と影）」と、さまざまな分野で「復興に向け果敢にチャレンジする人々との対話」を通じたインプット。複合災害を「福島だけの問題（他人事）」と限定せず、自分事としてどう活かすのか探究・創造するアウトプット。この一連のプログラムにより、「主体的・対話的で深い学び」を実現します。

福島の問題を
「他人事」から「自分事」へ

🧠 考える

震災・原子力災害の教訓を
未来（社会・地域・日常・自分自身）にどう活かすか

まとめのワークショップでは、複合災害により顕在化したさまざまな社会課題（人口減、高齢化、地域の衰退、エネルギー問題等）は「福島だけの問題」ではなく「日本社会や地域が抱え、解決すべき問題」という視点に立ち、自分たちがどのような未来を創っていきたいかなどについて議論します。

まとめのワークショップ

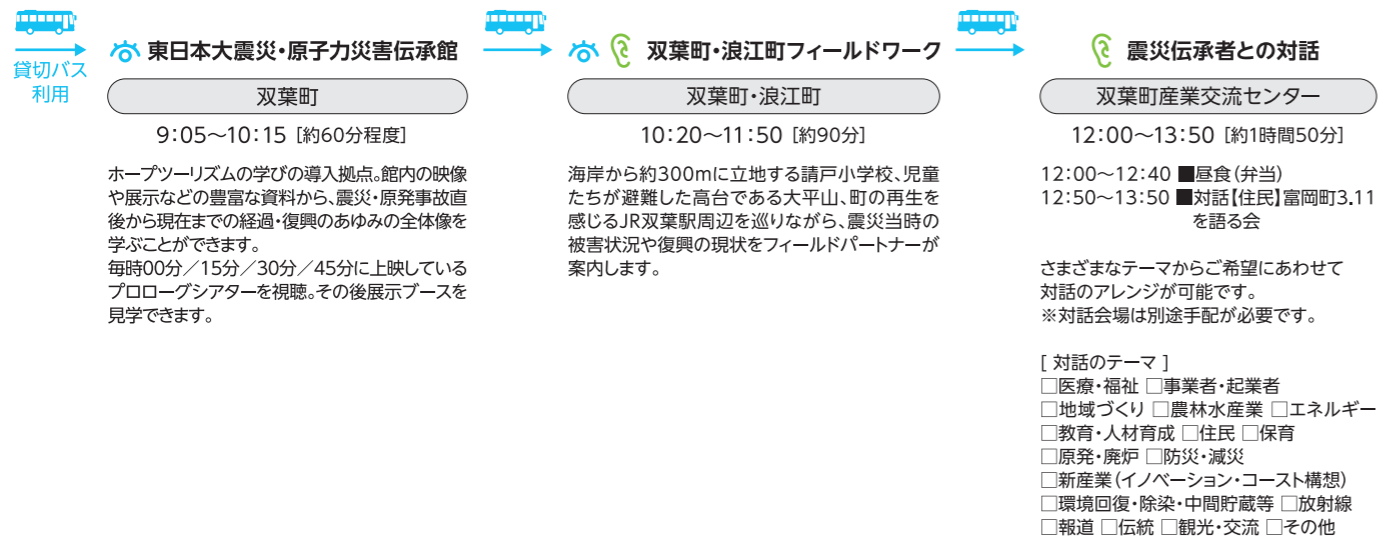


1日プランモデルコース

小中高生～大人まで対応可能(所要約5時間)
最大対応人数:240名程度(詳しくはお問い合わせください)

複合災害の全体像と復興に向かう地域に触れる

ホープツーリズムの基本コンセプト(見る・聞く・考える)を踏まえながら、学校行事や、一般団体のツアーにも対応可能なスタンダードなコースです。2020年9月にオープンした東日本大震災・原子力災害伝承館を起点に、震災・原子力災害の概要、復興の現状・課題に関する基礎知識等を学習します。バスにフィールドパートナーが同乗し、双葉町・浪江町のフィールドワークを行います。



【アンバサダーがすすめる理由】



福島大学
准教授
前川 直哉 氏

初めてホープツーリズムを実施する学校向け

震災・原発事故から長い年月が経過しました。県外の方からは「今の福島がどうなっているのか知りたい」という声をよく聞きます。震災・原発事故当時のことと、現在の福島をバランスよく学べるこのコースは、大人数(240名まで)にも対応可能。初めてホープツーリズムを実施する学校などに、特におすすめです。

【参加者の声】

現地に来ることで、見えることや感覚が変わる。風評被害払拭には、訪れて感じ、考えることが大切だと思う、まずは訪れること、それが一番必要。
(関西エリア私立高校生徒)

あまり福島や3.11について学んだことがなかったので、実際に自分の目で見て考えて、対話ができたのがすごくよかった。
(関西エリア私立高校生徒)

実際に震災の様子、復興の様子、人との関わりに触れたことでメディアを通じて見聞きしたこととの乖離を感じた。
(東海エリア高校教員)

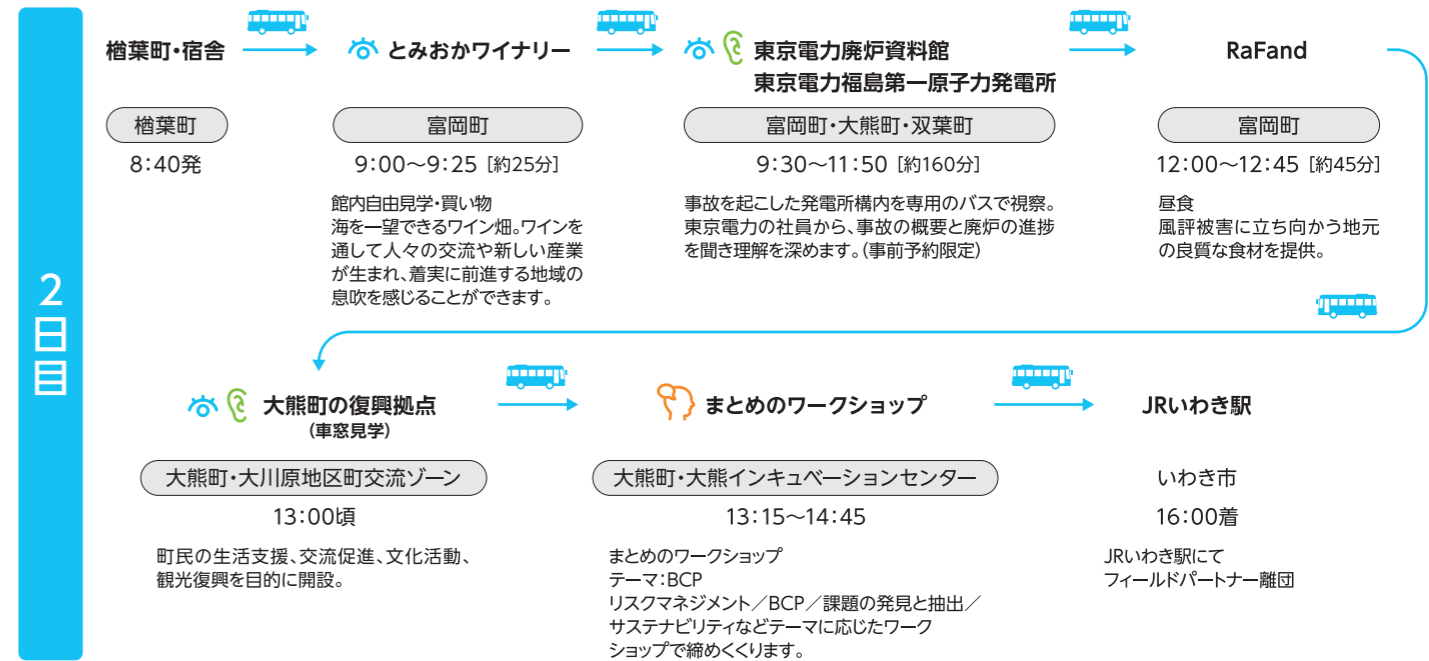


2日プランモデルコース

企業研修の実施事例

震災・原子力発電所事故の教訓等からこれからの社会に求められる企業等の役割を考える

世界で類を見ない「複合災害」は多様な分野に影響を及ぼし、多様な社会課題が顕在化しています。さまざまな分野で復興に挑戦する人々との対話、廃炉やロボット技術の研究開発、エネルギー関連産業などの最先端の取り組みから、顕在化した社会課題を体感することで、これからの社会に求められる企業等の役割(新規事業創造、CSV経営、CSR等の視点)や企業人としての挑戦等について改めて考えます。フィールドパートナーが2日間バスに同乗し、最終日はまとめのワークショップを行います。



【アンバサダーがすすめる理由】



浅野燃糸株式会社
代表取締役社長
浅野 雅己 氏

挑戦する企業の新たな息吹を感じる

壊滅的な震災・原子力震災から15年。その影が色濃く残る風景の真ん中で、挑戦する企業の新たな息吹が光り輝きます。その企業で働く19歳の女子社員に訪問者が問いかけました。「あなたにとって復興とは?」答えは「私がここにいること」。世界にも類を見ない絶望(影)と希望(光)のコントラスト。ふと日本の威厳を考えさせられます。

【参加者の声】

現実を直視して、そこから解決策を真剣に考えて解を見出す。その姿勢が福島にはある。日本の企業には、やると決めたらやり遂げる力があると実感した。(自動車部品メーカー)

さまざまなバックグラウンドを持った人たちに体験してもらい、会社や地域のリスクマネジメントに繋げてほしい。その価値のあるツアーだと思う。(建設グループ企業)

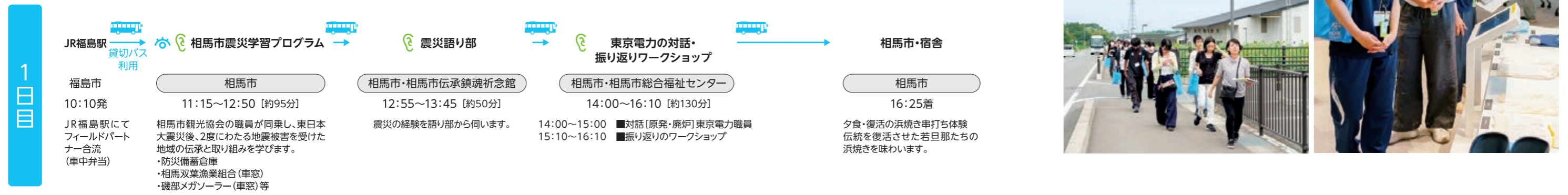
3日プランモデルコース

中学生・高校生の実施事例

福島の現状や課題をさまざまな角度から学ぶ

フィールドパートナーが3日間バスに同乗し、見学先の事前説明や見学後のフォロー、災害・復興の関連情報、車窓から見える周辺地域の現状を話しながら、行程を進めます。

1






JR福島駅 10:10発
JR福島駅にてフィールドパートナー合流(車中弁当)

相馬市 11:15~12:50 [約95分]
相馬市観光協会の職員が同乗し、東日本大震災後、2度にわたる地震被害を受けた地域の伝承と取り組みを学びます。
・防災備蓄倉庫
・相馬双葉漁業組合(車窓)
・磯部メガソーラー(車窓)等

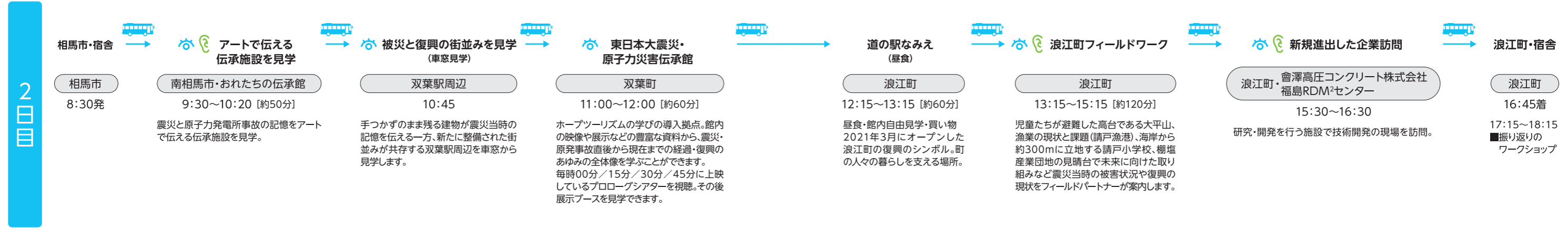
震災語り部 12:55~13:45 [約50分]
震災の経験を語り部から伺います。

東京電力の対話・振り返りワークショップ 14:00~16:10 [約130分]
■対話[原発・廃炉]東京電力職員
■振り返りのワークショップ

相馬市・宿舎 16:25着
夕食・復活の浜焼き串打ち体験
伝統を復活させた若旦那たちの浜焼きを味わいます。

2



相馬市・宿舎 8:30発

南相馬市・おれたちの伝承館 9:30~10:20 [約50分]
震災と原子力発電所事故の記憶をアートで伝える伝承施設を見学。

双葉駅周辺 10:45
手つかずのまま残る建物が震災当時の記憶を伝える一方、新たに整備された街並みが共存する双葉駅周辺を車窓から見学します。

双葉町 11:00~12:00 [約60分]
ホープツーリズムの学びの導入拠点。館内の映像や展示などの豊富な資料から、震災・原発事故直後から現在までの経過・復興のあゆみの全体像を学ぶことができます。毎時00分/15分/30分/45分に上映しているプロローグシアターを視聴。その後展示ブースを見学できます。

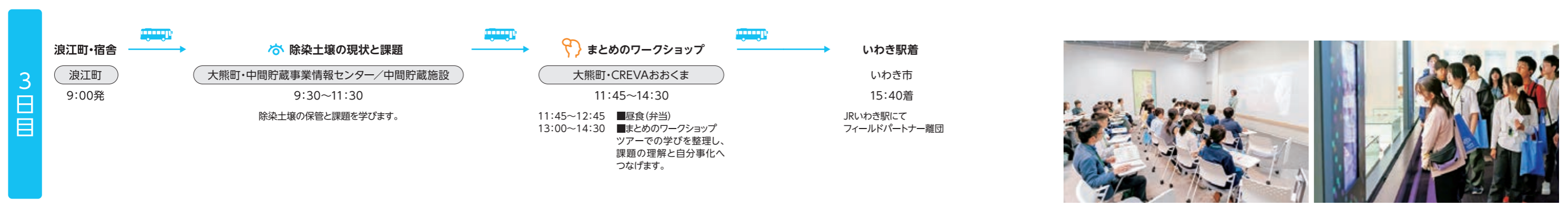
浪江町 12:15~13:15 [約60分]
昼食・館内自由見学・買い物
2021年3月にオープンした浪江町の復興のシンボル。町の人々の暮らしを支える場所。

浪江町 13:15~15:15 [約120分]
児童たちが避難した高台である大平山、漁業の現状と課題(請戸漁港)、海岸から約300mに立地する請戸小学校、棚塩産業団地の見晴台で未来に向けた取り組みなど震災当時の被害状況や復興の現状をフィールドパートナーが案内します。

浪江町 15:30~16:30
■新規進出した企業訪問
浪江町・會澤高圧コンクリート株式会社 福島RDM²センター
研究・開発を行う施設で技術開発の現場を訪問。

浪江町 16:45着
17:15~18:15
■振り返りのワークショップ

3





浪江町 9:00発


大熊町・中間貯蔵事業情報センター／中間貯蔵施設 9:30~11:30
除染土壌の保管と課題を学びます。

大熊町・CREVAおおくま 11:45~14:30
■昼食(弁当)
■まとめのワークショップ
ツアーでの学びを整理し、課題の理解と自分事化へつなげます。

いわき市 15:40着
JRいわき駅にてフィールドパートナー離団





アンバサダーがすすめる理由



灘中学校・高等学校 教諭 池田 拓也 氏

「もやもや」を抱えながら学びを深める
まずは3日間を通じて、さまざまなインプットを重ね福島の現状や課題について知ることが大切です。その上で参加者同士の対話や振り返りの時間をたくさんとって、「もやもや」を抱えながら、あるべき姿や未来について、みんなで学びを深めていきます。



株式会社ON-WORK 代表 映画監督 古波津 陽 氏

静かに心に残る、深い気づきの時間
取材で足を運び続けてきた立場から見ても、このコースは表面だけをぞらさない。仕事や食、アート表現の奥にある迷いや希望まで感じられ、「自分はこの出来事とどう関わるのか」を自然と考えさせられる体験になると思います。静かに、心に残る時間になるのではないのでしょうか。

参加者の声

最初は防災・減災について詳しく学ぼうと思ったが、原発事故や放射線に対する考え方が大きく変わり、その後の福島県の社会についてもっと詳しく知りたい! 学びたい! と思った。
(四国エリア県立高校生)

ワークショップを通して、人に伝えることで自分の頭も整理されてとてもよかった。また他の人の意見を聞いて勉強になったし、異なる考え方を知れて自分自身の成長につながり、より福島への理解を深められた。
(関西エリア府立高校生)

インプット活動に終始せず、お互いの意見を共有し、発表する機会があり、こういったアウトプット活動が充実していた点がよかった。震災学習にとどまらず、リーダーシップや論理的思考力、共感する力など、生徒にとっても大きく成長できる場となった。
(関西エリア県立高校教員)

フィールドパートナー (FP)

探究心・好奇心に寄り添う、現地で活躍する総合案内人

フィールドパートナーは、ツアー中のアテンド、ファシリテートを担当します。1日ごとの振り返り(リフレクション)や、最終日のワークショップなどを通し、中立・客観的な立場から、学びの成果へと導く総合案内人です。



【アンバサダーがすすめる理由】



福島大学
准教授
前川 直哉 氏

学びの水先案内人

ホープツーリズムではフィールドパートナーが行程に同行し、参加者の学びをサポートします。フィールドパートナーは単なるガイド役ではありません。参加者との対話を重ね、日々の振り返りやワークショップのファシリテーションを行いながら、一人ひとりの福島での学びを最大化することを目指します。単純化された議論や一方的な押し付けではなく、正解のない問いについて参加者とともにじっくりと考える、学びの水先案内人です。

フィールドパートナー (FP) が導く



インプット

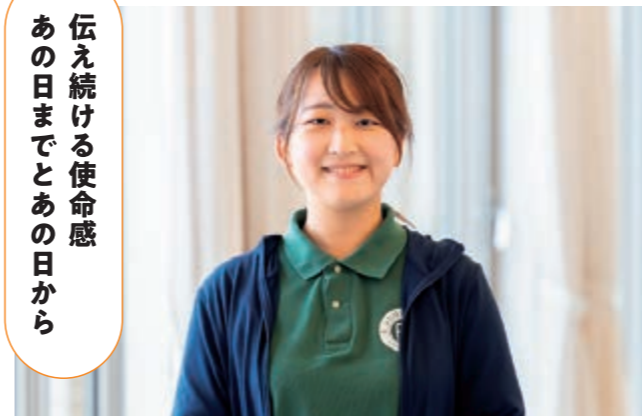
中立・客観的立場

アウトプット

振り返りや学びのまとめを行う
ワークショップの企画・運営

- バス車内や、フィールドワークの案内にて、震災・原子力災害、復興に関する情報の伝達
- 施設等の見学後、現地の人々との対話後の情報整理、補足説明
 - ▶ 論点の明確化、多様な視点への展開
- 随所の問い立て・介入
 - ▶ 参加者の探究心や学びに向かう力を引き出す

伝え続ける使命感
あの日までとあの日から



こいずみ みく
一般社団法人ふたばプロジェクト 職員
小泉 良空 さん

中学生の時に、震災と原発事故、それに伴う避難を経験しました。以後、この地域がネガティブな意味で注目されることが増え、「このまま終わらせたくはない」という思いが強まりました。地元が大好き!その気持ちから、この地域に帰ってきてフィールドパートナーを始めました。ここで生まれ育った自分だから伝えられる、あの日までの町の風景。そしていま、まちづくりの現場に立つ自分だから伝えられる、あの日からの町の動き。中立・客観的立場で参加者に伴走しながら、この地域の状況や事象の賛否ではなく、事実を伝えることを大切にしています。

プロフィール

福島県大熊町出身。2021年5月から双葉町のまちづくり会社であるふたばプロジェクトに勤務。伝承事業や情報発信を主に担当している。双葉郡で起こった出来事の実況や現状・少しずつ前進していく姿を、この地域で生まれ育った一人としての視点も持ちつつ伝えている。

この地域で
感じる想いは原動力へ



やまぐち ゆうじ
一般社団法人ふくしまリアリ 代表理事
山口 祐次 さん

私自身、被災した住民の一人です。避難先での生活再建を決め、震災と向き合うことが辛い時期もありました。だからこそ「この教訓は必ず活かさなければならない」という強い思いの中、自分の役割に気づき、フィールドパートナーを担当することになりました。ツアーでは「学びの空間をつくりあげる」ことが大切です。何のための学習なのか、見て・聞いて・何を感じ考えたか、どんな変化が生まれたか……。体験から得た想いは強い原動力になります。参加者一人ひとりがしっかりと自分のテーマを見つけ行動につなげるよう取り組んでいます。

プロフィール

長年、設備機器メーカーにおいて事業管理全般の責任者として勤務。震災で福島の事業所が閉鎖となったため退職し、オフィス・クリエイティブ福島を設立。各種スキルアップ研修や地域企業の経営サポート、地域づくりの業務にあたる。また2022年に一般社団法人ふくしまリアリを設立し、震災とその歩みの伝承、魅力溢れる地域づくりのための効果的なサポートに挑戦している。

参加者と共に
丁寧な物事に向き合う



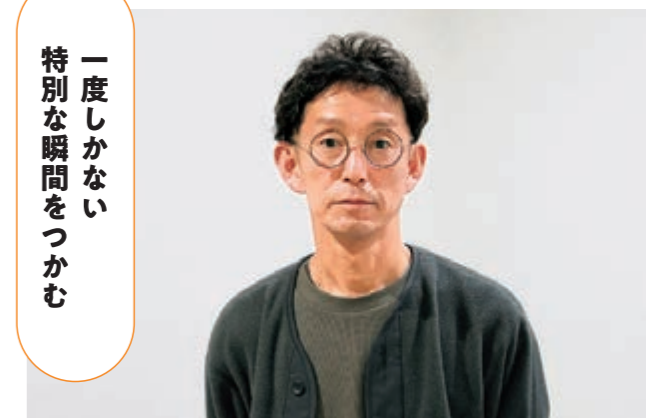
かんの たかあき
一般社団法人まちづくりなみえ 事務局次長
菅野 孝明 さん

フィールドパートナーとして、「事実を伝える」・「共に考える時間」・「考え続ける意識の醸成」を大切にしています。それを実現するために、相互理解につながる対話の場をつくるのが、ホープツーリズムのフィールドパートナーの重要な役割です。参加者は真剣な眼差しで話を聞き、感じたこと・考えたことを率直に伝えてくれます。実際に「来て、見て、感じて、共に考える」ことが、福島だけではなく、自分の地域や社会全体の未来につながります。「福島から学ぶ」場をつくり続けます。そして、私たちは参加者と共に学びに向き合う存在だと思っています。

プロフィール

建設コンサルタント、進学準備教育企業を経て、2012年にNPO法人ETICの「右腕プログラム」浪江町復興支援コーディネーターに採用。被災地復興、まちづくり計画作成・調整支援、住民との合意形成支援などに従事。現在は一般社団法人まちづくりなみえの事務局次長として、避難等による人口の大幅減からの新たなまちづくりに挑戦している。

一度しかない
特別な瞬間をつかむ



ひらやま まさし
一般財団法人 榎葉町振興公社 事務局次長
平山 将士 さん

心が動く瞬間を大切にしてほしい。僕はその瞬間をサポートしたいと考えています。ツアーの参加者にとっての非日常は僕たちの日常。その差から参加者が知る事、感じることは膨大なインプットになります。その中でこれからの生活に生きるヒントや教訓がこぼれてしまわないように参加者やツアー全体を洞察する。より多くの気づきをこのフィールドで得てほしいのです。参加者一人ひとりにとっては一度きりかもしれない場です。その一度でなにかしらのきっかけを発見できるよう導くことができるフィールドパートナーを目指しています。

プロフィール

福島県いわき市の地方新聞に20年余勤務し、主に社会部記者として報道の現場を歩く。東日本大震災時は、震災の記憶を残す報道写真集の企画・制作を担当。2018年4月に一般社団法人ならはみらいに入社。みんなの交流館ならはCANVASの開館に携わり、移住促進業務も担当など、復興の道を進む榎葉町のまちづくりに従事した。2025年4月より現職。榎葉町の観光振興に取り組む。

学びの流れ

事前学習／ 導入ガイダンス

ツアーに入る前に、震災・原子力災害の基礎知識（福島県の概要、被害状況、復旧状況の推移等）を解説。さらに学びの意識づけとして、ホープツーリズムの学びの特徴や多角的に物事を知る視点をレクチャーします。（オンラインまたは現地に対応。）



1日の振り返り (リフレクション)

毎日、ツアー（研修）の最後に振り返り（リフレクション）を行い、疑問や気づきなどを共有することで情報を整理。スムーズに最終日のワークショップに臨むことができます。仲間同士でも、感じ方や考え方には違いがあり、語れば語るほど視野が広がります。



ワークショップ

最終日にはまとめのワークショップを実施。ツアーでの学びを踏まえ、次世代を担う自分たちは、どんな未来を創っていきたいかについて、一人ひとりが社会を担う当事者として「自分事化」します。



教育旅行

福島の問題を、「他人事」から「自分事」へ

福島での教育旅行は、震災や原子力災害を「知識」として学ぶだけの時間ではありません。現地を見て、聞いて、対話することで、出来事の背景や今も続く課題を、自分自身の問題として捉え直していきます。正解のない問いに向き合い、多様な価値観に触れながら考え続ける経験は、社会を担う一人としての視点や、自ら行動する力を育みます。



持ち帰り・学びの成果

1

“もやもや感”を 持ち帰る

社会課題は簡単に解決しない（“もやもや感”を持ち帰る）と気付くことが、「考え続けること（探究心・自分事化）」へつながる。

2

多様性の尊重と 対話の重要性を学ぶ

社会課題は立場や考え方によってさまざまな意見がある。「多様性の尊重と対話の重要性」AorBの二者択一ではなく、議論によって第三の道(C)が開かれることもある。

3

「見極め力」「判断力」 を身につける

情報過多の社会における「物事の本質を見極める力」や「判断力（リテラシー）」を身につける。情報とどう向き合い選択・判断するか。自分で見聞きした生の情報の重要性。

4

変化や逆境への 向き合い方を学ぶ

変化や逆境への向き合い方（人生観・生き方）。進路選択や生き方について希望と不安の狭間に立つ生徒の皆さんに、挑戦することの大切さを伝える。

Goal 福島で感じた希望。それは明日の学びの原動力 ▶▶▶ 参加者自身の成長へ!

学習教材のご案内

学習教材のご案内

震災・原発事故当時の状況、現在までの復興のあゆみ、現状・課題の全体像を学ぶことができる「福島のあの日からいま（教科書）」と事前学習・ツアー中・事後学習の各場面で学びを整理する「学びノート」を活用することで、生徒一人ひとりの主体的・創造的な学びをサポートします。また、ホープツーリズムを実施する団体様を対象に、ご希望にあわせてフィールドパートナーとのオンライン事前学習を行っています。震災・原子力災害の基礎知識（福島県の概要、被害状況、復旧状況の推移等）を解説します。



(ツアー前) 事前学習

気づき・疑問の発見・事前調査
※オンライン事前学習対応

(ツアー中) 情報整理

情報整理・気づき・疑問の深化・まとめ

(ツアー後) 事後学習

学びを自分事化（更なる探究・行動変容）

企業研修

正解のない時代に、考え続ける力を育てる

福島での企業研修は、複合災害という前例のない状況の中で、判断と選択を積み重ねてきた人々との対話を通じて、組織や社会が直面する課題を現実的に捉え直す機会です。現場の声に触れ、自ら問いを立て、立場や価値観の異なる意見と向き合うことで、変化の時代に求められる判断力や対話力、意思決定の軸を磨いていきます。



なぜ「福島」で「人材育成研修」なのか

福島は社会課題が一度に顕在化した地域であり、未曾有の大災害の中で、その解決に尽力している企業が多数存在します。そのノウハウや戦略は、今後の日本企業が持続的に存続し続ける新しいモデルといえます。「地域創生」と「企業と人の成長」はつながっており、創生に向かう福島の企業からは、繁栄や成長のヒントが得られると言えます。

⚠️ リスクマネジメント

💡 問題解決・課題解決

👥 コミュニケーション

🏢 CSV: CSR

🌱 環境配慮

🤝 ダイバーシティ

Goal ▶▶▶ 未来志向で持続的な企業運営視点と社会人意識を醸成

未曾有の大災害に直面した福島では、人材や技能の奪い合いではなく、補い合うことで前進する、連携型の運営構造が成り立っています。ホープツーリズムの人材育成研修は、持続可能な企業運営のヒントをみつけ、より良い社会を実現する人材の育成を目指します。

地域創生

グローバル
事業展開

雇用創出

担い手確保

コミュニケーション
能力向上

シビックプライド
醸成

技能向上

リーダー育成

復興に向け果敢にチャレンジする人々との対話

震災や原子力災害という、これまでにない困難を経験した福島には、各分野で現実から目を背けることなく、課題に向き合い続けてきた人々がいます。地域の再生、新しい産業の創出、失われた日常の再構築。その一つひとつに、簡単な答えはありません。だからこそ、福島での学びは「聞く」だけでは終わらず、「対話」を通して、自分自身の考えを問い直す時間へと広がっていきます。

対話を通して、正解のない問いを一緒に考えてみませんか？

震災・津波、原子力災害、風評被害…、未曾有の困難の中でも、復興に向けて挑戦を続ける人々が福島にはいます。そうした人々との対話は、成功談を学ぶ場というより、課題にどう向き合い、悩み、選択し、歩み続けてきたのかを知る機会となります。現地で語られる迷いや葛藤、未来への思いに触れることで、参加者は福島の課題を特別なものとして捉えるのではなく、自分自身や社会と重ね合わせ、正解のない問いを考え続ける視点と、次の行動へのきっかけにつながります。



あさの ねんし
浅野燃糸株式会社 双葉事業所


「浅野燃糸株式会社(本社:岐阜県)は、特許技術燃糸「SUPER ZERO(スーパーゼロ)」の生産拠点として、双葉町中野地区に燃糸工場を整備し、生産体制を強化してきました。震災と原子力災害の影響を受けた地域において、新たな工場を構え、雇用を生み出しながらもづくりを継続することは、大きな決断を伴う挑戦でもあります。同社は、国内外へ向けた製品供給を担う拠点としての役割を持たせることで、事業としての持続性と地域との関わりを両立させています。また、双葉町で働くことを選んだ若手社員が現場を支え、地域に根ざした働き方や将来像を描きながら、復興の一端を担っています。産業と人の流れを町に取り戻し、次の世代へつなげていく。その実践が、双葉町で続けられています。見学では、最新の設備が稼働する現場を間近に感じられるほか、直営ショップで双葉町ならではの製品に触れられる点も魅力の一つです(見学は事前予約制)。



もとき ひろし
株式会社ワンダーファーム 代表取締役 元木 寛 さん

農と食の魅力を体験できるワンダー(wonder=驚嘆すべき)なファーム(farm=農場)を目指して事業設立。トマトの出荷および、農業を身近に感じる体験型テーマパークの運営によって、農作物の付加価値向上、地域の活性化だけでなく、農業の担い手育成に取り組んでいます。同社は、生産から加工・販売、体験までを一体で展開することで、農業を「つくる」だけでなく、人が集い、学び、地域とつながる場へと広がってきました。震災後の環境変化の中でも、地域の農業を次の世代につなぐために挑戦を続け、訪れる人々に“食”を入口とした新しい交流の形を生み出しています。その積み重ねが、地域の魅力発信と農業の可能性を広げる力になっています。

医療



南相馬市立総合病院 顧問
おいかわ ともよし
及川 友好 さん

震災当時、東京電力福島第一原子力発電所から23kmに位置する中核病院で副院長として現場を指揮。原発の状況が深刻化する中、「病院を、患者を、スタッフをどうするべきか…」自らが下した決断や葛藤を題材にリーダーのあり方について語ります。刻一刻と変化する情報と限られた選択肢の中で、何を優先し、どう判断したのか。医療現場のリアルな経験を通して、危機対応や組織を守る責任について考える機会を届けます。


地域づくり



一般社団法人葛力創造舎 代表理事
したえだ ひろのり
下枝 浩徳 さん

震災後、故郷である葛尾村にUターンし、「一般社団法人葛力創造舎」を設立。葛尾村のコミュニティの崩壊を解消するため、地域コミュニティのサポートや地域の活力を支える人材の育成に取り組んでいます。また、地域の資源を活用した事業を起こすなど、事業開発を通して地域づくりに力を入れており、人と人との結びつきを大切に活動を行っています。

エネルギー



一般社団法人えこね 南相馬研究機構 理事長
たかはし そうへい
高橋 荘平 さん

地域再生のため、地元農家と共同し、作物を作っている農地の上に太陽光パネルを並べて発電する「ソーラーシェアリング」による半農半エネのモデルを推進。売電の副収入により農家の収入安定化を図り、持続可能な農業とエネルギーの地産地消を目指しています。南相馬では、震災後の農業再生の糸口として、地域の人々とともに農業と発電を両立する新たな農村のあり方を切り拓いてきました。この仕組みは農地を守り、暮らしを再生する道として多くの人々が学びに訪れています。


教育・人材育成



in the Rye株式会社 代表取締役
おきの しょうへい
沖野 昇平 さん

東京で立ち上げた事業を、2年前に大熊町へ拠点ごと移し、地域と世界をつなぐ挑戦を続けてきました。地方の子どもたちと都市圏の留学生を結ぶグローバル教育を展開し、「生まれた場所に関係なく、広い世界で活躍できる未来」を具体的な形として示しています。教育を軸に、復興と人づくりを進めています。地域の学校や関係者と連携しながら、学びの場づくりや交流の機会を生み出し、子どもたちが自分の可能性を広げるきっかけを届けています。


住民



NPO法人 富岡町3.11を語る会

語り部事業を通じて、被災地の真実を伝え、復興のあるべき姿を共に考え、実現することを目的に、富岡高校の校長を務めた青木淑子代表を中心として設立。あの日起こったこと、長期の避難生活、一部避難指示解除後の地域の現状・課題について、住民の視点や体験をベースに率直な想いを語ります。「復興」という言葉が一人歩きして、単なる言葉で終わらないためには、震災・原発事故から「共に学び、考える」人が増えて行くことが重要との想いから「語り伝える言葉」に日々、挑戦しています。

保育



いわき・双葉の子育て 応援コミュニティcotohana 共同代表
こばやし なおこ
小林 奈保子 さん

震災後の双葉郡の子育て環境に向き合いながら、子どもと子育て家庭がつながり支え合う地域コミュニティづくりに取り組んでいます。双葉郡の子育て世帯が安心して暮らせる場をつくるため、親子サロンや交流イベント、子育て関連情報の発信・情報誌の制作など多彩な活動を展開。「暮らしをもっと楽しく、もっと豊かに」という合言葉のもと、子育てを通じた地域全体の支え合いと関係づくりを進めています。


防災・減災



SSK行政書士事務所 代表
ささき くにひろ
佐々木 邦浩 さん

震災時は避難所の運営から仮設住宅建設、富岡町災害復興計画(第二次)の策定に奔走。自らが経験した震災の教訓を未来につなげる取組みを行っています。「避難所ワークショップ」では、避難所での共同生活を舞台に、災害が発生する前に取り組むべき行動を考えます。限られた情報や資源の中で、何を優先し、どう合意形成するのか。現場のリアルな視点から、防災を「自分の行動」に落とし込む学びを深めます。日常の備えを見直すきっかけにもなります。

伝統



team風童
えのさうち まさかず
榎内 正和 さん

富岡町で和太鼓団体team風童を率い、和太鼓を通じた地域づくりに取り組んでいます。東日本大震災で太鼓をすべて失いながらも、「太鼓で人を元気づけたい」という思いを原点に活動を再開。子どもたちへの指導や町民向けの教室、復興公営住宅での交流活動、太鼓まつりの開催などを続けてきました。音に合わせて打つ体験を通して、人と人がつながり、前向きな気持ち生まれる場を育んでいます。


水産業



株式会社おのざき 代表取締役社長
おのざき ゆういち
小野崎 雄一 さん

創業100年を迎えた福島県最大の鮮魚店「おのざき」の4代目。東日本大震災や原子力発電所事故による風評被害の影響で低迷した福島県の水産業を盛り上げるため、福島県沖の親潮と黒潮がぶつかる栄養豊富な海で育った魚介類「常磐もの」を使用した新商品の開発や県内外での消費を喚起するイベントの開催、SNSを駆使した情報発信などを展開。福島県が世界に誇る「常磐もの」を世界ブランドとすることを目標として多岐に渡る活動を行っています。

原発・廃炉



東京電力ホールディングス株式会社 福島復興本社
あべ しょうたろう
阿部 翔太郎 さん

福島復興本社の職員から東京電力福島第一原子力発電所の廃炉作業の進捗状況、復興に向けた取り組みについて直接聞くことができます。また、一定の条件を満たす場合は、職員のアテンド付きで、東京電力福島第一原子力発電所構内を視察することができます。現場での説明を通して、廃炉の工程や安全対策への理解を深めるとともに、復興に向けた課題とこれからの取り組みを自分事として考える機会になります。


起業家・農業



株式会社ReFruits 代表取締役 / 取締役
はらぐち たくや
原口 拓也 さん
あべ しょうたろう
阿部 翔太郎 さん

原子力発電所事故の避難指示と除染作業による果樹の伐採で生産者がいなくなった大熊町の特産品キウイを復活させるため、県外から移住した大学生2人で創業。100年後も大熊町で美味しいキウイが食べられるような持続可能な果樹生産事業の確立を目指して日々挑戦しています。栽培だけでなく、地域の人々と関係を築きながら、担い手不足や農地の再生といった課題にも向き合い、新たな産業の形をつくり出しています。

住民



一般社団法人大熊未来塾 代表理事
きむら のりお
木村 紀夫 さん

東日本大震災による津波で父と妻、次女を失った体験から学んだ教訓を次世代に残すことを目的として2020年に大熊未来塾を立ち上げました。主な活動として自宅跡のある中間貯蔵施設区域のフィールドワークを通してあの日何が起こったのかを伝えているほか、講話では震災からの復興の過程で自身が感じた矛盾、もやもやについて語ることで、参加者により良い社会とは何かを考えるきっかけを与えています。



災害の全体像を学ぶ

① 東日本大震災・原子力災害伝承館



正にホープツーリズムの学びの導入拠点。館内の映像や展示などの豊富な資料から、震災・原発事故直後から現在までの経過・復興の歩みの全体像を学ぶことができます。地震、津波、東京電力福島第一原子力発電所事故という、福島県が経験した世界でも類を見ない未曾有の複合災害の記録やそこから得られた教訓、そして復興の歩みを国内外に伝え、さらには将来へ引き継いでいくためにつくられた施設です。また、館内では被災体験を伝える語り部講話を1日4回実施しています。語り部は被災当時の年代や場所により被災体験が異なり、語る内容は津波や原発事故による避難などさまざまです。館内には資料や実際の記録映像などが多数展示され、震災・原発事故直後から現在までの経過や復興の歩みについて学ぶことができます。



■ 双葉町大字中野字高田39 ■ 東日本大震災・原子力災害伝承館 0240-23-4402

爪痕の中に見いだす希望の光

② 震災遺構 浪江町立請戸小学校



海岸から約300mに立地。校舎は津波に吞まれ半壊しましたが、迅速な判断と避難により奇跡的に犠牲者は出ませんでした。今なお被災当時の様子がほぼそのまま残っています。福島県では初となる震災遺構。震災の脅威や教訓とともに、地域の記憶や記録を後世に伝えるため、また、防災意識を高めることを目的として、被災当時の姿を保存しています。津波の被害が大きい1階の教室部分と体育館は限りなくそのままに近い状態で残され、校外や通路などからも見学できるよう整備されています。2階部分には震災の被害の大きさや原子力災害による避難の経緯などについて伝えるパネルのほか、訪れた人が黒板に書いた応援メッセージなどが保存されています。



■ 浪江町請戸持平56 ■ 震災遺構浪江町立請戸小学校 0240-23-7041

津波被害の状況を一望できる高台の共同墓地

③ 浪江町営大平山霊園



海岸から約2km離れた高台に広がる共同墓地。請戸地区や太平洋を一望でき、津波の被害の基大さを感じます。地震発生直後、請戸小学校の児童が避難に向かった場所で、当時は畑が広がっていました。その後町民の希望により、震災によって亡くなったご遺族のためのお墓がつくれ、「大平山霊園」として整備されました。犠牲者への鎮魂、後世への訓戒のためにコミュニティ広場に建てられた慰霊碑とともに、震災の記憶を今に伝えています。

■ 浪江町請戸
■ 浪江町建設課 0240-34-2111 (代)

肌で感じる震災の爪痕と町の再生

④ JR双葉駅周辺



新たなまちづくりが始まっている双葉町の中心地。震災直後から手付かずの建物が残る一方で、希望にあふれるウォールアートが地域を彩ります。さらに、新しい施設の整備や既存建物の利活用などが進み、来るたびに変わる景色に、町の再生を肌で感じるすることができます。*

■ 双葉町大字長塚字町西39番地2 (JR双葉駅)
■ 双葉町復興推進課 0240-33-0127

長い歴史の中の「あの日」を残す

⑤ とみおかアーカイブ・ミュージアム



ふるさとを思い、まもり、つなげる拠点施設として2021年7月11日に開館。「複合災害を地域の歴史に位置づける」をテーマに震災前からの富岡町の成り立ちから、複合災害により突然奪われた「当たり前の日常」や「あの日」を境に起こった町の変化を伝え、自然災害や原子力災害の経験を未来に継承することを目的としています。事前に希望すれば展示解説が受けられます。



■ 富岡町本岡王塚760-1
■ とみおかアーカイブ・ミュージアム 0240-25-8644

記憶の伝承、想いが集まる場所

⑥ 相馬市の震災学習プログラム(相馬市観光協会)



津波で被災した相馬市の震災前の風景や、犠牲者への鎮魂の思いを後世へ伝える「相馬市伝承鎮魂祈念館」では、震災当時の写真や津波映像などの展示を見学できます。松川浦の旅館街では、伝統食「浜焼き」体験も可能。震災前の話を聞きながら、カレイやイカを串に刺して味わいます。(※夜は対象宿泊者のみ。昼食体験は要相談)

相馬市復興視察ガイドにお申込みの場合は、オプションで「震災語り部」講話を受けることができます。料金:震災語り部 3,000円/1団体(30名まで) 30名を超える場合、100円/1名追加となります。



■ 相馬市中村字北町55-1 ■ 相馬市観光協会 0244-35-3300

日常が突然消えたまち、やってきたクロスロード

⑦ 南相馬市教育旅行プログラム(南相馬市観光交流課)



ある日突然日常がなくなったまち。未曾有の大災害が私たちの暮らしになにももたらしたのか。1日目のフィールドワークでは、「避難指示」がまちをどう変貌させたのか事実を目の当たりにします。そんなリセットされた地で人々に否応なくやってきた人生の「クロスロード」(分岐点)。家族、仕事、暮らし…。人々はどのような決断に迫られ、どう前を向いたのか。南相馬市には「むしろあの忌まわしい災害が自分を成長させた」そう話す人々がいます。2日目のワークショップでは、彼らを訪問しそれぞれのクロスロードに触れます。彼らの紡ぐ言葉を自分の人生にトレスし、「自分だったら」に思いを馳せる2日間の一気通貫のプログラムです(受入人数は1回30名まで)。

■ 福島県南相馬市原町区本町2-27 ■ 南相馬市観光交流課 0244-24-5263

いわき市の震災経験を将来にわたり発信

⑧ いわき市の震災学習プログラム(いわき震災伝承みらい館)



いわき市における震災や復興の様子を伝える資料や映像、パネル、震災語り部による講話などを通じ、震災の記憶や教訓を確実に後世に伝え、防災意識の向上を図ることを目的とした施設です。震災語り部は、館内における講話だけでなく、地域をめぐりながら震災時の状況や復興した街の様子を語るガイドツアー、学校等への出張による防災教育講話も実施しています。



■ いわき市薄磯3-11 ■ いわき震災伝承みらい館 0246-38-4894

中間貯蔵施設や地域の発信拠点

9 中間貯蔵事業情報センター



中間貯蔵事業、除去土壌等の復興再生利用及び県外最終処分をはじめとする福島復興・環境再生の取組を発信する施設です。館内は10のゾーンで構成され、事業の進捗や規模感を視覚的に伝える展示のほか、土地を提供した大熊町・双葉町の想いについて触れることができます。



■ 大熊町大字下野上字大野116番5 大熊町産業交流施設 CREVAおおくま1階 ■ 中間貯蔵事業情報センター 0240-25-8377

除去土壌の再生利用や県外最終処分を学ぶ

10 中間貯蔵施設



福島県内の除染で発生した土壌や廃棄物を最終処分までの間、安全に管理・保管するための施設です。施設内は見学が可能で、高台からは土壌貯蔵施設の一部や東京電力第一原子力発電所を見ることができます。



■ 中間貯蔵事業情報センター 0240-25-8377

環境の視点から福島の未来を考える

11 福島県環境創造センター交流棟 コミュタン福島



「コミュタン福島」は、放射線や環境問題を身近な視点から学び理解するため、福島県が設置した施設です。環境回復への意識を深めようという目的で、模型や映像、グラフィック等により、震災と原子力災害、放射線やふくしまの環境の現状について展示しているほか、360度全球型シアターやホールなども備えています。コミュタン福島で得た学びや、体験から得た知識、深めた意識などを共有し、福島の未来を考え、行動するきっかけとすることが目的です。



■ 三春町深作10-2 (田村西部工業団地内) ■ 福島県環境創造センター交流棟「コミュタン福島」0247-61-5721

埋立処分事業について体験しながら学べる

12 特定廃棄物埋立情報館 リプルンふくしま



放射性物質に汚染された廃棄物等の埋立処分について学べる体験型の情報館。埋立処分事業の概要や必要性、安全対策、進捗状況などについて、「見て」「触れて」「学ぶ」ことができます。ほかにも見学だけでなく、埋立処分技術や放射線の基礎知識などが学べるさまざまな参加型イベントを実施しています。



■ 富岡町大字上郡山字太田526-7 ■ 特定廃棄物埋立情報館リプルンふくしま 0240-23-7781

遠隔技術開発の最前線

13 日本原子力研究開発機構 榎葉遠隔技術開発センター (NARREC)



東京電力福島第一原子力発電所の廃炉を推進するために遠隔操作機器の開発・実証試験を行う供用施設です。原子炉建屋内の一部を再現したバーチャルリアリティ (VR) 体験や遠隔ロボットの操作体験、試験設備の見学を行うことができます。廃炉作業の計画作成・作業訓練に活用可能なVRシステムなどを備えた研究管理棟と、大空間を有する試験棟で構成されており、外部利用者を有する試験棟にさまざまな実規模模擬 (モックアップ) 試験が行われています。遠隔技術の実証試験に必要な環境を提供するとともに、情報発信も行うことで、遠隔技術開発の中核拠点となることを目指してつくられました。



■ 榎葉町山田岡中丸1-22 ■ 国立研究開発法人日本原子力研究開発機構 福島廃炉安全工学研究所 榎葉遠隔技術開発センター 0240-26-1040

事故当時の状況や廃炉事業について知る

14 東京電力廃炉資料館



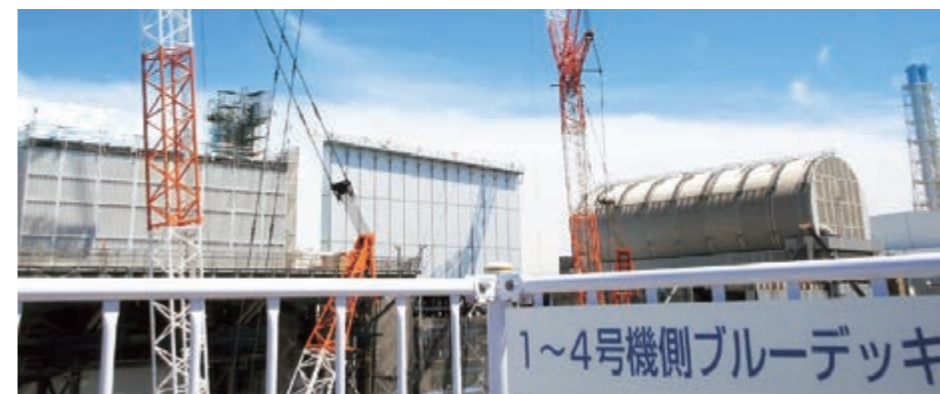
原子力発電所事故の概要と、廃炉に向けた取り組みの全体像を整理して紹介する情報発信施設です。東京電力の情報発信施設。映像やジオラマの展示により原子力事故の記憶と記録を残すとともに、今後も続く廃炉の進捗状況について学ぶことができます。



■ 富岡町中央三丁目58番地 ■ 東京電力 廃炉資料館 0120-502-957

廃炉に向けた現場の取り組みを見学する

15 東京電力福島第一原子力発電所



東京電力福島第一原子力発電所では、東京電力の職員が構内を専用バスで案内する視察コースを用意しています。2011年3月11日に発生した東日本大震災とその後の津波により電源を喪失し、事故を起こしてしまった福島第一原子力発電所ですが、本コースでは、当時の事故の状況や資料で説明を受けたのち、実際に発電所構内に入り、原子炉建屋やALPS処理水設備を高台から視察し、最新の廃炉作業の状況を確認することができます。

※本視察は高校生以上が対象です

出典：東京電力ホールディングス

■ 福島県観光物産交流協会 (ホープツーリズム推進課) 024-525-4060

我が国唯一の再生可能エネルギー研究に特化した公的研究機関

16 産業技術総合研究所 福島再生可能エネルギー研究所(FREA)



政府の東日本大震災からの復興の基本方針に基づき、再生可能エネルギーに関わる開かれた世界最先端の研究と、新しい産業の集積を通じた震災からの復興支援という二つの大きなミッションを掲げ、2014年4月に産業技術総合研究所の研究拠点として開所しました。広大な実証フィールドを有しているのが、FREAの特徴の一つです。このフィールドを活かし、産業界・大学などと連携しながら、事業化や製品化に向けた研究、将来の再生可能エネルギー分野を担う産業人材育成に力を入れています。



● 国立研究開発法人 産業技術総合研究所
 ■ 郡山市待池台2-2-9 ■ 国立研究開発法人 産業技術総合研究所 福島再生可能エネルギー研究所 (FREA) 024-963-1805

水素社会実現に向けた先端企業等が集結
 たなしお

17 浪江町棚塩産業団地(海光の丘)



水素エネルギーや木材産業など、次世代産業の集積拠点として位置付けられている、浪江町の産業団地です。世界最大級の水素製造拠点「福島水素エネルギー研究フィールド」をはじめとした水素活用関連企業のほか、国内最大規模の集材材製造施設「福島高度集材センター」など、先端企業が集結しています。「海光の丘」からは産業団地と太平洋が一望でき、海から昇る朝日も楽しめます。



■ 浪江町大字棚塩(棚塩産業団地内) ■ 浪江町産業振興課 0240-34-0248

自然エネルギーが町に光をもたらす

18 富岡復興メガソーラー・SAKURA



震災と複合災害の影響で生じた遊休農地を活用し、約40ヘクタールの敷地に太陽光パネルを設置した発電事業です。国・県・市町村・関係企業が連携する福島県再生可能エネルギー復興推進協議会の取り組みの一つとして、再生可能エネルギーを通じた地域復興に寄与しています。売電収入の一部は、地元団体を通じてまちづくりや復興支援に活用されています。



■ 富岡町大字上手岡字大石原(下千里地内)
 ■ 福島発電(株) 浜通り事務所 0240-23-5154

地域の風力を最大限に利用した再生可能エネルギー

19 阿武隈風力発電所



阿武隈風力発電所は、福島県の再エネ推進ビジョンと新エネ社会構想のもと、地域と協働して進められてきた風力発電事業です。田村市、大熊町、浪江町、葛尾村の4市町村に風車46基を設置し、合計発電出力が147MWで、年間約12万世帯分の電力を供給する国内最大の陸上風力発電所として、持続可能なエネルギー社会を支えています。



■ 福島県田村市都路町岩井沢字道ノ内65番地1
 ■ 福島復興風力合同会社 0247-61-7585

世界に誇る特許を持った燃糸技術

20 浅野燃糸フタバスーパーゼロミル



独自技術による糸づくりを行い、双葉町から国内外へ製品を届けている製造拠点です。ものづくりを通して、地域の産業と交流の広がりを受けています。約5年の歳月を費やして完成させた、特許技術燃糸「SUPER ZERO※」の生産拠点。大規模工場で燃られた糸は、国内はもちろん世界へ輸出されています。工場のほかショップやカフェも併設しており交流人口拡大を担う拠点となっています。

※世界初の特許燃糸工法で開発した糸。繊維製品に吸水性・速乾性等の機能を付加する。



■ 双葉町中野館ノ内1-1 ■ 浅野燃糸(株) 双葉事業所 0240-23-7648

最先端技術の実証と産業創出

21 福島RDM²センター



福島県浪江町にある福島RDM²センターは、會澤高圧コンクリート株式会社が設置・運営する研究開発型生産拠点です。研究(Research)・開発(Development)・量産(Manufacturing)・拡販(Marketing)を一体で行う体制のもと、研究開発棟と工場棟で構成されています。本拠点では、蓄電コンクリートをはじめ、自己治癒コンクリート、3Dプリンター技術、再生可能エネルギー関連技術などの研究開発・検証を行い、社会実装を見据えた技術の高度化を進めています。福島イノベーション・コースト構想のもと、「復興をイノベーションの力でやり遂げる」という考え方を背景に、次世代のものづくりや新たな産業創出につながる技術開発を推進する拠点として位置づけられています。



■ 浪江町請戸北迫1-3 ■ 福島RDM²センター 0240-23-4391

福島の未来をつくるロボットの開発拠点

22 福島ロボットテストフィールド



浜通り地域等の産業回復のための国家プロジェクト「福島イノベーション・コースト構想」により整備された、陸・海・空のフィールドロボットの一大開発実証拠点。南相馬市復興工業団地内の東西約1,000m、南北約500mの敷地内に、インフラや災害現場など実際の使用環境を再現した複数の施設があり、企業や大学等がロボットの性能評価や操縦訓練等を行うことができます。



■ 南相馬市原町区萱浜字新赤沼83(南相馬市復興工業団地内)
 ■ (公財)福島イノベーション・コースト構想推進機構 0244-26-3431

お米と変えていくみんなの未来~日本発のお米のバイオマスプラスチック~

23 株式会社ライスレジン



株式会社ライスレジンは、2021年、福島県浪江町に製造工場を設立し、政府備蓄米、古米などの、食用として消費されなかったお米を、独自の技術で「ライスレジン(バイオマスプラスチック)」へとアップサイクルしています。地域で育てたお米を原料に、環境負荷の少ない素材を生み出すことで、資源循環型社会と持続可能なものづくりを推進しています。



■ 浪江町棚塩北金ヶ森1-1
 ■ (株)ライスレジン 0240-23-5107

交流人口の拡大

復興の象徴、アスリートたちの聖地

24 Jヴィレッジ



日本初のサッカー・ナショナルトレーニングセンターでサッカー日本代表の合宿も行われました。震災直後は原子力災害の対応拠点として使用されていましたが、復旧が進み、2018年7月に一部営業を再開。2019年4月には全面再開を果たしました。浜通りに位置し、東北地方にありながら温暖な気候のため、冬季でも雪の影響をあまり受けることなく年間を通してサッカーを楽しめます。施設面積は、東京ドーム10個分となる49haにも及び、天然芝や人工芝のピッチはもちろんのこと、全天候型サッカー練習場、レストランやホテル、ホール、フィットネスジムなども備えた一大トレーニングセンターです。スポーツだけでなくさまざまな分野で多くの人が集い、復興のシンボルになることが期待されています。



■ 楢葉町山田岡美シ森8 ■ (株)Jヴィレッジ 0240-26-0111

浪江町の「今」を感じられる復興のシンボル

25 道の駅なみえ



道の駅なみえは、2021年3月、町の魅力と情報を手に入れることができる交流と観光、情報発信といった多機能型施設としてグランドオープンしました。施設内には、地元農産物や海産物、加工品などを取りそろえた直売所や飲食スペース、町の伝統産品である大堀相馬焼と地酒の販売、陶芸体験などができる地場産品販売施設も併設。また、町内外の人々が集い、交流する場としても機能しており、日常のにぎわいや人のつながりが生まれています。道の駅なみえは、復興の歩みの中で育まれてきた浪江の「今」を感じられる場所です。



■ 浪江町幾世橋知命寺60 ■ 道の駅なみえ 0240-23-7121

ワイン用ブドウの苗植え・作業体験

26 とみおかワイナリー



ワインづくりを通して、富岡町の自然や風土を活かした新たな産業と人のつながりを育む拠点です。海を一望できるワイン畑で、ブドウの苗植えや剪定、圃場の除草作業を体験できます。ワインを通して人々の交流や新しい産業が生まれ、着実に前進する地域の息吹を感じることができます。企業CSR活動としての活用も可能です。(時期や天候によりプログラムに変動あり。)



■ 富岡町小浜反町36-1 ■ とみおかワイナリー 0240-23-7606

農業の再生復興

町の新たな特産品 熱帯フルーツを開発

28 トロピカル・フルーツミュージアム



震災以降休止していた二ツ沼総合公園にあるフラワーセンター内の園芸ハウスを亜熱帯に近い環境にし、国産熱帯フルーツ栽培を行っています。町の新たな特産品として国産バナナ「綺麗」を開発。農業と観光の再生のため、今後もさらなる特産品を生み出すことを目指しています。



■ 広野町下北迫大谷地原57-1 ■ (株)広野町振興公社 0240-23-7704

トマト収穫体験

27 ワンダーファーム



大型ハウスで1年中トマト狩り体験を楽しめます。なかなか入る機会のないトマト栽培ハウスに入り、実際にトマトを採ってみましょう。同社規定の袋がいっぱいになるまでトマト狩りができます。採れたてのトマトのおいしさを体感してみましょう。



■ いわき市四倉町中島字広町1 ■ (株)ワンダーファーム 0246-38-8851

ICTを活用した最先端技術で農業復興

29 ネクサスファームおおくま



2018年設立。2019年4月から大熊町でいちごの栽培を開始。敷地面積4.8ha、栽培面積2.2haの太陽光利用型植物工場、夏季は業務用、冬季は小売用を中心に通年栽培・販売を行っています。苺を贅沢に使用した加工品の開発と販売も行っています。



■ 大熊町大字大川原字西平2127 ■ (株)ネクサスファームおおくま 0240-23-7671

スマート農業を駆使して、ふるさとを活性化

30 紅梅夢ファーム (こうばいゆめファーム)



一時は帰還困難区域に指定された南相馬市小高区の農業再生に取り組んでいます。平均年齢20代の担い手を中心に、スマート農業による徹底した品質管理で、信頼される商品を提供しています。



■ 南相馬市小高区蛇沢字藤沼160 ■ (株)紅梅夢ファーム 0244-44-6200

ホップとビールで「人」「もの」「こと」の循環をつくる

31 ホップジャパン



田村市内の委託農家で栽培されたホップを使用する都路町のプルワリー。1次産業から3次産業を一貫して行うことで6次化に展開し、通常廃棄される麦芽カス等は飼・肥料として自然に戻す0次化に取り組んでいます。



■ 田村市都路町岩井沢北185-6(グリーンパーク都路内) ■ (株)ホップジャパン 0247-61-5330

川内村の賑わい創出の起点

32 かわうちワイナリー



震災復興、新たな農業への挑戦、地方創生の取り組みの一環として、村内で収穫するブドウからワインを生産することを目指して発足。2021年春には村内産のブドウを活用したワインが完成しました。



■ 川内村上川内大平2-1 ■ かわうちワイン(株) 0240-25-8868

考え続ける理由が、福島にある

福島には、簡単に答えの出ない問いがあります。

流れた時間の中で生まれた葛藤や迷い、そして前を向くための選択。

その一つひとつに、考え続けてきた人々の姿があります。

ここでの学びは、答えを受け取るのではなく、自分自身に問いを残すこと。

その問いが、これからの行動や判断を支える確かな軸となっていきます。



ホープツーリズムオリジナルペコ (ホープペコ)

ホープペコとは、福島県の代表的な伝統工芸品である赤ペコに、ホープツーリズムのロゴマークに使用している5色(藍、緑、黄、茶、赤橙)で製作したオリジナルペコです。各色は海と空(藍)、豊かな自然(緑)、未来(黄)、福島の大地(茶)、太陽(赤橙)を表現しています。



ホープツーリズムに関する総合窓口

福島県観光物産交流協会では、ホープツーリズムに関するコンテンツの集約、団体様の学びのニーズへの対応、旅行会社様の商品造成・ツアー催行をサポートする現地手配機能を兼ね備えた「総合窓口」を設置しております。

お問い合わせ先 (ホープツーリズム・教育旅行推進部門)

MAIL

hopetourism@tif.ne.jp

TEL

024-525-4060

受付時間 8:30~17:30 (土日祝日、12/29~1/3を除く)

WEBSITE



<https://www.hopetourism.jp/>

ホープツーリズム



サイト内には、旅行会社様の商品造成やツアー実施に役立つ詳細情報を掲載した専用ページを設けておりますので、ぜひ、ご利用ください。

総合窓口の機能

- 1 コンテンツ (見学施設・復興に向け果敢にチャレンジする人々、フィールドワーク、食事・宿泊施設等) の情報収集、集約
→ 情報提供
- 2 広域ツアー、モデルコースの造成
→ 情報提供
- 3 旅行AGT専用ページによるコンテンツ等の情報提供
- 4 現地手配 (ランドオペレーター) 機能
【国内手配業務】
- 5 「ホープツーリズム」商標使用申請受付

福島県浜通りを巡る旅のご案内はこちら

東日本大震災から10年以上が経過し、福島県浜通り地域には、美しい自然、伝統文化、グルメ、新たな産業、復興に取り組んでいる人々との出会いが待っています。



[詳しくはこちら](#)

<https://hopetourism-enjoyplus.jp/>

発行 福島県観光交流局観光交流課

〒960-8670 福島県福島市杉妻町2-16 TEL.024-521-8734 FAX.024-521-7888

問 (公財) 福島県観光物産交流協会 ホープツーリズム・教育旅行推進部門

〒960-8053 福島県福島市三河南町1-20 コラッセふくしま7階 TEL.024-525-4060 FAX.024-525-4087

●本誌掲載データは、2026年1月現在のものです。●内容は予告なく変更される場合もありますので事前にご確認ください。●掲載の記事・写真・図版・イラスト等の無断転載を禁じます。また、写真はすべてイメージであり実物とは異なる場合があります。●掲載の地図や縮尺、所要時間などは、おおよその目安となるものです。●この冊子に掲載された内容により生じたトラブルや損害などについては、補償いたしかねますので、予めご了承願います。